

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第Ⅲ部

	名 称	解 説	
	Ⅲ 中世の文学		
		<p>中世は、12世紀末から16世紀までの約400年間を指します。それまで権力を握っていた貴族や寺社勢力に加え、新たに武士が力を伸ばした時代です。政治の実権が武士へ移行した鎌倉時代に始まり、天皇が巻き返しを図り混迷した南北朝時代、再び武家の政権となった室町時代を経て、下克上の安土桃山時代に至るまで、不安定な政局と度重なる戦いは文学にも多大な影響を与えました。</p>	
	鎌倉・南北朝時代の文学	<p>文治元年（1185）、鎌倉に幕府が開かれると、東国は存在感を増し、文学にも影響を及ぼします。地方や民衆を描いた説話文学が発展し、旅を素材とした紀行文学も生まれました。戦乱は、京の文化を地方に広げるとともに、現実社会への批判や歴史への関心を高め、軍記や史論が盛んに作られます。不安な日常から人々は救いを求め、仏の教えを説いた法語や無常観を根拠とした隠遁者の文学が誕生します。</p>	
	和歌	<p>武家に対抗した後鳥羽院は、貴族文化の和歌を推進します。史上最大規模の「千五百番歌合」が催され、八代集の最後を飾る『新古今和歌集』が編纂されました。私家集では、万葉調の歌を詠んだ源実朝の『金槐和歌集』が名高く、この頃、藤原定家の撰とされる『小倉百人一首』も編まれます。和歌への批評意識から、定家の『近代秀歌』や鴨長明の『無名抄』など歌論も作られました。</p>	
	歌謡	<p>東国の鎌倉では、前代の今様をうけて、七五調を主とした早歌（宴曲）と呼ばれる長編の歌謡が武家の間で愛好されます。拍子が早いために早歌と名付けられ、芸能者ではなく、武士が自分で歌う歌として作られました。『源氏物語』などの古典のほか、仏典や漢籍を出典とし、武士の教養の向上にも役立ちました。早歌の大成者である明空の撰んだ『宴曲集』が知られています。</p>	
	物語	<p>鎌倉時代に入っても、王朝文化への憧れから宮廷社会の恋愛を題材とした物語が数多く作られました。鎌倉初期の物語評論『無名草子』には、多数の作品名が見られますが、現存する物語はわずかです。現存の物語では、継母の迫害を逃れた姫君が長谷寺観音の霊験により幸せな結婚にいたる『住吉物語』などは題材や趣向に工夫を見せ、絵入り本も数多く制作されました。</p>	
	軍記物語	<p>戦乱のたびに語り伝えられた英雄伝などが記録され、軍記物語が誕生します。鎌倉初期の『保元物語』『平治物語』は、和漢混交文で生き生きと武将たちの活躍を描きます。続く『平家物語』は平氏の興亡を語る軍記物語の一大巨編で、多くの語り手や読者の手を経て、改訂・増補が繰り返されました。南北朝の内乱を中心とする『太平記』は政治や社会への鋭い批判がうかがえます。</p>	
	歴史物語・史論	<p>平安時代の『大鏡』『今鏡』のあとを受けて、鎌倉初期に『水鏡』、南北朝期には『増鏡』が書かれました。京都の宮廷生活を描いた『増鏡』には、作者の王朝社会への憧れがうかがえます。また、相次ぐ戦乱を反映して、歴史の背後にある原理を解き明かそうとする史論も登場します。北畠親房による『神皇正統記』は、神道を基本に南朝の正当性を強く主張しています。</p>	
	日記・紀行	<p>新しい政治都市鎌倉の誕生によって、東海道は整備され、京と鎌倉を往来する旅を素材として日記や紀行文が成立しました。東海道の情景と旅情を描いた代表的な紀行文学に、『海道記』『東関紀行』があります。藤原為家の後妻となった阿仏尼による『十六夜日記』は、実子の為相と先妻の子為氏との間で生じた所領争いの訴訟のため、鎌倉に下向する様子を綴っています。</p>	
	随筆	<p>動乱の時代、新しい社会に不安を抱いたり、不満や批判を持ったりした人々の中には、出家して俗世を離れた隠者（隠遁者・世捨て人）となる人たちがいました。山里に庵を結んだり、諸国を遊行したりして無常を觀じ、仏道修行に励み、いくつかの文学作品を残したのです。中世文学の特徴である無常観を基調とした、鴨長明の『方丈記』と兼好の『徒然草』は隠者文学の双璧といえます。</p>	
	説話	<p>中世は説話の時代と言われるほど、数多くの説話集が誕生します。新時代の到来は、地方や庶民の世界の話に新鮮な興味を呼び起こし、盗賊や大力の女の話など世俗の説話や「こぶ取り」などの民話を語る『宇治拾遺物語』が編まれました。戦乱の世で仏教信仰も高まるなか、通俗的な例話をもとに教理を巧みに説いた無住の『沙石集』などの仏教説話集も著述されました。</p>	
	五山文学	<p>鎌倉時代に伝来した禅宗は、幕府の保護を受け、鎌倉・京の五山の寺を中心に栄えます。夢窓疎石や虎関師錬など幅広い学識を持つ五山僧によって、漢詩文を中心とした漢文芸が盛んになります。『夢中間答集』は、足利尊氏の弟直義の質問に答えて夢窓が禅の教えを述べた法語で、五山で開版されました。室町時代には、義堂周信や絶海中津などの学僧も活躍し、連歌にも影響を与えました。</p>	

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第三部

名称	解説
室町・安土桃山時代の文学	長く続いた内乱も、三代将軍足利義満の頃には次第に収まり、明徳3年（1392）、南北朝の合一が実現します。文学は芸能と融合し、享受層を拡大します。和歌の余技として始まった連歌は庶民にも広まり、民衆の芸能であった能・狂言は貴族や武士にも愛好されました。民衆や異類などを積極的に取り込んだ物語絵が作られ、町衆の思いをうたった小歌も流行します。文学・芸能の成立や受容の場で、庶民が大きな影響力を持つに至ります。
和歌	室町時代になると、『新続古今和歌集』を最後に勅撰集は幕を閉じます。足利義教に嫌悪され、勅撰集への入集を拒否されたものの、流派にとらわれない旺盛な作歌活動を展開した室町歌人として、正徹が注目されます。『草根集』には一万首を越す詠歌が伝えられ、弟子による聞き書き『正徹物語』には、余情・妖艶の新古今調への復帰を主張し、藤原定家を尊崇する姿勢がうかがえます。
連歌	連歌は、和歌の上の句と下の句を別の人が詠み、その唱和のしかた（付け合い）を楽しむ文芸です。平安時代から和歌の余興としてなされ、南北朝時代に、時の関白二条良基らによって初の連歌集『菟玖波集』が編まれます。室町時代には心敬などの連歌師が現れ、連歌論集『ささめごと』を著し、宗祇らの『新撰菟玖波集』によって大成し、俳諧の連歌から近世の俳諧へと継承されます。
歌謡	室町時代になると、宮廷歌謡の大歌に対し、七五調をもとにした自由な詩型の小歌が流行します。男女の恋愛をうたったものが多く、話し言葉なども取り入れられ、庶民の感情を生き生きと伝えています。『閑吟集』や『宗安小歌集』といった小歌の歌集も編纂され、なかには能や狂言、お伽草子の詞章とよく似たものも多く、互いに影響を与えていたことがうかがえます。
御伽草子	室町時代から江戸前期にかけて、お伽草子と総称される短編の物語が数多く作られます。都市文化の発達に応じて、それまでの貴族の恋愛や英雄の活躍だけでなく、『浦島太郎』『文正草子』など庶民を主人公にしたものや、異類による合戦を描いたなどの物語が盛んに作られたのです。その多くは絵が付けられ、絵巻や奈良絵本として、さまざまな人々に愛好されました。
軍記物語	源義経の悲劇的な生涯を描いた『義経記』や、曾我兄弟の仇討ちを物語る『曾我物語』など、合戦の群像ではなく、個人の運命を描いた物語が作られます。悲劇の運命をたどった者への共感と鎮魂の思いの込められた「語り」を通して、人々に享受されました。「判官物」「曾我物」として、物語だけでなく芸能や絵画などにも展開し、後世まで長く語り継がれていきました。
説話・縁起	相次ぐ戦乱で後盾を失った寺社は、自らの存続をかけて正当性を主張し、信仰を宣布するため、数多くの寺社縁起や宗派の祖師伝を制作しました。絵巻や掛け幅の絵伝に仕立てられ、時には民衆の前で披露されました。和歌山県の道成寺の縁起は、歌舞伎で知られる安珍・清姫の伝説を伝えています。絵巻を見せながら物語を語る「絵解き」は現在も道成寺で行われています。
能・狂言	平安時代までの猿楽や田楽は演劇色を強め、専門の芸能集団（座）も現れ、有力な寺社に所属しました。大和猿楽四座のうち、結崎座に出た観阿弥・世阿弥親子は、能の台本である謡曲の作者として、また能役者としても優れ、能を芸術として大成します。一方、庶民的な喜劇である狂言は、社会風刺や権力批判を込めて口語で演じられ、やがて能と能の間に上演されるようになります。
幸若舞曲・説経	室町後期になると、物語に合わせて舞われた幸若舞（曲舞）や「ささら」という楽器に合わせて語られた説経節など「語り物」の芸能が流行します。幸若舞は『義経記』や『曾我物語』などに取材したものが多く、武将の間で人気を博しました。「山椒大夫」や「小栗判官」など新たな迫力のある物語を生み出した説経節は、民衆の心をとらえ、近世の浄瑠璃の源流となりました。
キリシタン文学	16世紀に渡来したキリスト教の宣教師たちは、布教や日本語学習のためにローマ字で翻訳・著述活動をおこないました。天草版【あまくさばん】『平家物語』やイソップ童話のローマ字での和訳本の天草版『伊曾保物語』、イエズス会によるカトリック教会の教理本『どちりな・きりしたん』やポルトガル語の辞書の『日葡辞書』などがあります。当時の口語を知ることができる貴重な書物です。